

調査の先鞭をつけたもので未だ地質技師と地形技師との區別のつかなくつた頃のもので地質調査の結果としては今から見れば幼稚なものであつたことは言ふを俟たない、然し鑛業を目的とした地質調査としては空前のものと言へるし

助手を如何にして一つばしの地質技師に養成して行かんとしたかのライマンの苦心の跡は本篇で窺ふことが出来る。日本地學論文集の次篇は和田、ライン、パンペリーなどの古い所の一つを選びたいと思ふ。(編譯者)

## 伊 太 利 と こ ろ ぐ (十六)

瀧 川 規 一

【ボムペイのヴェチの家】 ヴェチの家(Casa dei Vetti)の大廣間に描かれてある數多きキューピッドとサイキの壁畫は仔細に凝視すればする程興味の盡きないものがある。そのキューピットの童形を數へるならば的に向つて石を投げて居るキューピッド、橄欖の實を搾つてゐるキューピッド、油を製して香料を一人の婦人に捧げてゐるキューピッド、戰車を羚羊に牽かして疾驅けてゐるキューピッド、その他布に襪をつけて洗濯せるキューピッド、及び毎年七月九日に催されるヴェスタ(Vesta)のお祭の光景がある。このお祭の

日には驢馬さへも休日をとると云はれてゐる。ヴェスタは爐の女神であり貞節の女神であり、彫刻にては長きガウンを着けて貞淑恭謙な婦人の姿に作られる女神である。この女神の爲めに古代希臘の處女は常に殿堂で神火を燃やすことを絶たさなかつた。これをヴェスタの處女の火と普通に稱せられる。鍛冶をなせるキューピッド、葡萄を集めてゐるキューピッド、葡萄酒を搾れるもの、パッカスのお祭の行列をなせるもの、酒を鬻げるキューピッドなど順次に檢する時、その可憐な小供の姿に見惚れるのである。

ポセイドン(Poseidon)とアミモネ(Amythone)が一つに描かれてゐる。アミモネはセイトに捕へられポセイドンによつて救ひ出された女性である。兩人は不可離の關係をこれによつて示されてゐる。アポロとダフネ(Daphne)の繪がある。この兩神も亦離れることの出来ぬ關係をもつてゐる。アポロはダフネの後を追うて止まぬので、ダフネは遂に桂樹に變形して漸く追求を免れた。仇し男を避けてカフエの女給になると同様である。パツカスとアリアドネの繪がある。この兩者も既述の關係によつて別離を禁ずる關係である。ヘルセアス(Perseus)とアンドロメダ(Andromeda)の繪がある。エシオピア及びカシオピア國の王女であるが、アンドロメダは女神ジュノよりも美人たることを自ら誇つたが爲めに神罰を蒙り海の怪物の犠牲となつて海の岩に縛りつけられた。怪物を殺ろしてアンドロメダを救ひ自らその夫君となつたのがペルセアスである。矢張り離れ難い夫婦の間柄である。またハーマフロダイト(Hermaphrodite)

伊太利ところへ

ite)とシレナス(Silenus)の繪がある。シレナスは獅子鼻と太鼓腹の持主で男性であり、ハーマフロダイトは實は男性であるが、胴體手足は女性的な肉付きをしてゐる。この兩人が不可分の關係にありとは寡聞にして未だ所以を知らない。只パツカスの一味である點に於て一緒に描かれたのかも知れない。或は女性的肉體を見て女性と見做したのかも知れない。神代よりの斯うした仲のよい連中を一緒に描いた點が興味がある。

キュービッドは人の知る如く男性の小兒であるこれに配するには必ず處女の小兒を以てしなければならぬ。こゝに於てサイキ(Psyche)の繪が必要になる。人の知るが如くサイキは美しき處女である。愛の女神ヴァイナスの永久の配偶者男神アモル(Amor)によつて愛された。人間の靈魂の化身であるとも云はれる。この美しきサイキが肩に羽翼を以て描かれてゐる。見る目を魅する美しき小娘が美しき花を集めてゐるのである。

神話の戰士アガメムノン(Agamemnon)が神鹿の牝鹿を殺さんとて森林の神アルテミス(Artemis)即ダイアナの殺生禁斷の地に入らんとする繪がある。またバルナサス(Parnassus)山の岩窟に棲んでゐた大蛇パイソン(Python)をデルファイ(Delphi)附近で退治した時のアポロの像が描かれてある。更にオレステス(Orestes)とその友人ピラデス(Pyllades)の兩人がタウリス(Tauris)の國王ソアス(Thoas)とイフィゼニア(Iphigenia)との前に居る繪がある。既に述べた如くオレステスは父の仇を報じた後、神托によつてタウリスからアルテミスの像をアゼンスに持ち歸ることを神から命ぜられた。妹のイフィゼニアの助力によつて神命を果したがその時イフィゼニアはタウリス國に留つて國王ソアスに仕へ、アルテミスの神宣を司る女官となつた。今彼女が國王と並んで立てる所以はこれによつて解せられる。

戰の斧と楯をもつてゐる女傑の群アマゾンが描かれ、それと一緒に多くの女性が神供の犧

牲をなす時に使用する道具をもつてゐる繪があり、また若きセイタと女性のバツカンテスが小太鼓をたゝいて踊り狂へる繪がある。バツカス神の凡ゆる種類の奉仕者の狂態を描ける壁畫に觀覽の眼を惹く。淫恣の神プリアパス(Priapus)の小立像の存置せる臺所裏の室には淫畫がある。決して見せないと稱せられてゐるが、それをさくと益見なくなるのが人の心である。神秘の扉を如何にして開かしめんと苦心し、極めて敏捷に交渉の果を得た米婦人があつた。その機逸せず機會均等の効を奏し得た邦人もあつた。要するにこの家は紀元第一世紀のポムペイの住宅のよい標本である。多くの壁畫は既述の如く第四期に屬するものであるが、これを分つて二群とし、その一を紀元六三年以後のものとするれば他の一群はそれより五〇年以前のものであるとされてゐる。古き一群は趣味が洗鍊されて居る。朱色か黒色か何れかの一色を用ひ壁畫と壁畫との間には裝飾的小帶を以て隔を作り小さき圓柱があり裝飾燈があり其他建築上の裝飾が

ある。描かれた人物は亦色調に於てけばくしき對照を避け調和を巧に計つてゐる。後者の六三年以後のものに至つては技術の點に於て一段劣り粗莽であり拙である。この差異より推察すれば、この家には六三年以前は教育あり藝術の趣味に通曉した人が住んで居り、當時の知名の一流の藝術家を招いて家の裝飾を依頼したのではないかと思はれる。然るに六三年以後には二人の解放された奴隸ヴェテウス (Vetius) が住んでゐた。六三年には地震があつて家が破壊し修繕が必要になつた。奴隸とは云へ、この家に住む程であるから成上り者の富者であつたが、如何せん藝術的な眼がなかつた。只間に合はせに職人上りの者を傭つて壁を修繕せしめた。職人上りの者である丈けに、最初の住居者の撰んだ藝術家の手腕は到底持ち得ない。斯くして職人の手になつた壁畫は後期の壁畫であり、前後兩群の間に著しき藝術的及び巧拙の差異を生じた。本題のヴェテチの家とはこの奴隸の名によつて命名されたのである。

伊太利ところへ

【ボムペイの住宅の構造】 英國の小説家リットン卿の筆になる「ボムペイの最後の日」を讀む者にとつて、最も想像力を必要とする頁はボムペイの住家を説明せる部分である。他の案内書を讀んでも亦これをよく理解するに餘程の理解力を必要とする。こゝに於て百聞一見に若かずの嘆聲が起る。抑もボムペイの廢墟にある市民の住宅を見る時に、未だ破壊されざる一軒の家を空想して見る必要がある。ヴェテチの家の如き住み心地のよささうな廣い家もあれば、さうでもない小さき家もある。今餘り廣からぬ普通の家を想像して見る。扱て大體の概念として建物の中央に一つの大きな部屋を想像する。この中央の大きな間を *atrium* と呼ぶ。アトリアムの屋根には長方形若くは方形の天窓式の穴が開いてゐる。この穴は昔は煙出の用をしたものであつて、屋内で燃やされた爐などの煙の出口になつてゐた。今日でも煙の爲めに梁などは黒くなつてゐる。 *atrium* の語義を云ふならば、「黒い」の意である。後期になるとこの煙出しの周

圍の屋根が中央のこの穴に向つて傾斜し、屋根に落ちた雨水がこの穴に集められ、穴の下に水鉢若くは泉水を備へて水を一箇所に受けるやうになつてゐる。この水槽のことを *impluvium* と云ふ。

中央の廣間は周圍に幾つかの小室によつて圍繞されてゐる。この小室のことを *cubicula* 若くは *alae* と呼んでゐる。家の門口から歩を運び入れるとすると、突當りの正面に大廣間に接して一種のヴェランダ若くは四阿とも云ふべきものがある。これを *tablinum* と云ふ。これを通り抜けると庭園又は中庭とも云ふ可き處に達する。初期の最古き家は一階であつて二階ではない。この型の家の標本はボムペイにて唯一の古く且つ醫者の家として紹介される *Casa dei chirurgis* 醫師の家である。此の家で發見された外科醫の諸道具が今日博物館に展覽されてゐる。希臘の影響を受ける頃になると、初期の單純な家が稍複雑になる。建物の背後にも擴張され上方に向つても擴大される。二階三階と上階が

増加されたのは希臘の影響である。表通りに面した部屋は店として利用される。大廣間のアトリウムとその隣接のタブリナムとの隔は只カーテンに過ぎなくなり、タブリナムは廣さに於てアトリウムの半分位となる。これ等の部屋から外に出るには觀音開きの戸がある。外には廻廊 (*peristyle*) があり廻廊を支へる圓柱の列 (*colonnades*) がある。故にこれを柱廊と云ふ。柱廊の外圍には寢室、臺所等の種々の部屋があつて大廣間に直接に接してゐる室よりも地盤が低く作られてゐる。

タブリナム及びその左右にある室は食堂として用ひられる。食堂のことを *triclinium* と云ふ表通りに面してゐる一階の壁には窓がなく、窓は只二階にのみつけられてある。二階若くは三階の家は極めて稀である。然し窓は硝子窓であつた。この古代に於て硝子窓のあつたことは實に珍奇とするに足る。フォラムの浴室にあつた硝子窓、カサ・デル・ファウノにあつた硝子窓が唯一の遺物である。

從來はポムペイの家屋は羅馬式だと稱せられてゐたが近年に至つてこの見解に一大變化を惹き起した。チベル河口にあるオスチア (Ostia) と稱する港町を發掘した結果見解のこの變化を來たしたのである。この町は羅馬の紀元一世紀頃の古き港であり大市場であつた。其處に發掘されたダイアナの家 (Casa di Diana) は今日のフラットと稱する借家そつくりの構造である。勿論アトリウムも無ければ廻廊もない。只中央に大廣間があるばかりであり、家によつてはそれすらも無いのである。この大廣間の周圍に幾多の室が同じ形式で作られて居り、表に面した處には大きな窓があり、どの階にも此處彼處にバルコニがある。全くの最近の借家の様式である。窓が大きく中庭からも外側からも空氣の流通がよく光線もよく入る。四階或は五階になつて居る。一棟の家には幾多の家族が住み得る。表の壁は煉瓦のむき出しであつて、漆喰を塗つてゐない。階段は廣く全く今日の伊太利の下宿屋若くは安宿に似てゐる。これが紀元元年近く

伊太利ところぐ

のものとするれば、ポムペイの住宅とは全く似つかぬものである。ポムペイの住宅は一階若くは二階であつて希臘式の廻廊があり、表の壁は漆喰で塗られ、既述の如く中央の廣間、ペランダ式の室、廻廊と列柱、及び水槽があり光線及び空氣は内部からとるやうな様式であり、窓は極めて小さく、元來より一家族の住宅を本意としてをる。階段も亦狭い。斯く兩者の差異が明なる以上ポムペイの住宅は羅馬式であるとはどうしても云ひ難い。

【ポムペイの道路】ポムペイ見物者にとつて第一に注意を惹き起すものは小河の如くにして小河ならざる道路である。小河の河底が敷石で敷き詰められてゐる觀を呈し、敷詰めた石を個々に觀察すれば略六角形である。この敷石はもとゞ多角形の石灰岩であつたらしく思はれる河底らしき處が車道であり、車の往來は頻繁であつたらしく文字通りに車の轍の跡が敷石を擦り減らして遺つてゐる。車道の兩側には歩道が數尺も高くつけられてある。歩道も亦小石若く

四七

七三

は大理石の破片で敷詰められて居りその上に漆喰をしてあつた。敷尺も高い歩道から見れば車道は河底の如く見えるのは當然であり、従つて轍跡を見てもそれだとは直に感づかない。説明を聞いて初めて知り得る。河底否車道のとある敷石の上に案内者のアントニオは突然手にせるステツキを突き立て、何喰はぬ顔をして彼の寫眞をとれとすゝめる。撮影し終ると「早く現象して何故に撮影を客に迫つたかの理由を自ら發見せよ」と云ふ。「寫眞は未だ新米だから豫期の如く鮮に結果を得るや否や疑問であるからさう勿體をつけずに説明せよ」とせがむ。アントニオはその老顔に微笑を浮べながら「それでは向側の家屋の壁を見よ、あすこに何があるか」と云ふ。云はるゝが儘に壁を見ても一向他の壁と異なる處がない。只一尺ばかりの長さの丸太の如き石片が壁の隅から突き出てゐる丈けである。「屋壁から一尺内外の石棒の突出が何を意味するかその意味甚深望にして俗眼には解し得ない」と答へると、案内者はカラ／＼と笑ひ出し

た。「俗には一層容易に判る筈だが」と云つて益々すましてゐる。仔細に見ると件の石棒は男根の形をしてゐる。それがそれかと聞きたゞすとアントニオは只一言「然り」と云ふや否や、立てて持つてゐたステツキをもつて敷石をコツ／＼音たかく叩く。ステツキの叩く敷石を見ると、敷石には男子の陰部が浮彫に刻されてゐると、「判つたか、敷石のそれと、壁のそれと互に照應し、敷石のそれはそれを使用する家の所在を指示し、壁のそれは客を迎へる意を指すに非らずんば、家の所在を示してゐるのだ。そこまで云はねば判らぬとは若いに似合はぬ合點カンの悪い男だナ、數日前に案内した日本人はそんな説明をしなくても直にそれと察したのに。まあ／＼判つてよい。それではその家に案内をしよう」と今は廢墟の娼家に入る。娼家の入口近くから二十七八歳の米國婦人がオー、マイの感嘆詞を投げて出て來た。これは既に述べた。そのあと直に時をすかさず屋内に入る。云ふまでもオーマイの嘆聲に値する丈けの秘書を見るのである

或る地域を限つて娼家がある。今日の公娼制に似てゐる。兎に角車道の敷石にまで念入りの廣告である。處々歩道が二尺ばかりも車道より高くなつてゐる。斯る場所では向側の歩道からこちら側の歩道に横切る爲めに車道に飛び石が三個から五個まで置かれてゐる。飛び石のことであるから勿論同じ高さの石である。車道を河底と見たのはあながち僻目ではなかつた。降雨の際には諸方から集まる雨水はこの車道に流れ込む。溝の設備がないので車道は流水奔騰して俄かに河となる。斯る時車道を横切らんとする者の便を計つて飛び石を置いたのである。

車道の道幅は或る處は漸く一臺の車を通ずるに足る丈けのものがある。車道の中央に遺した轍跡より察してこれを遺したものは荷車でなかつたかと思はれる。行き交ふ車はこの狭き道を如何に通過したかの疑問が起る。この疑問に答へるものは前述の飛石のある車道横斷の箇所である。恰も單線の電車が往き來の電車を回避す

るが如き役目をなしてゐるのが飛石のある箇所である。今日大都會で見るが如く車馬がいくつも行き交ふ丈けの道幅がない。故に當時の人は昇床カキドのやうな物に乗つたのではないかと想像されてゐる。

## 新著紹介

アレクス・ラドー 政治經濟地圖、第一輯

ALEX RADO: ATLAS FÜR POLITIK

WIRTSCHAFT ARBEITERBEWEGUNG I. DER IMPERIALISMUS

本地圖は VERLAG FÜR LITERATUR UND POLITIK, WIEN/BERLIN より新たに發行されたものである。(定價一〇マルク)一六八頁より成り一二〇圖を含む最近の人文地理學界に於ては新らしき種々なる分野に於て注目すべき發展が成されつゝある様に思はれるが、そのうちにも地理學をば所謂机上の空論に止まらしめず、動きつゝある現實に關連して應用的方面たる地政學にまで發展さしつゝあるのは特に目立つた傾向であらうと思ふ。

而して一方我々の見てゐる地圖はどうかと言ふに從來の地形圖或は政治區劃圖、地名圖等であつて質的には何等の進展